令和６年度第１回大東市幼保小の架け橋プログラム検討会議　議事録

日時：令和６年８月６日（火）午後２時～４時

場所：南別館会議室

出席者：西口委員(会長)、長谷委員(副会長)、永田委員、藤井委員、大野委員、西村委員、

蔵下委員、浅井委員、谷川委員、長町委員

事務局

指導・人権教育課：村島総括次長

教育研究所：加地主査

こども家庭室子ども政策グループ：栗田総括次長

こども家庭室保育幼稚園グループ：渡辺課長

こども家庭室子ども政策グループ：道岡上席主査

事務局

定刻となりましたので、ただいまより、令和６年度第１回「大東市幼保小の架け橋プログラム検討会議」を開催させていただきます。本日はお忙しい中、お集まりいただきありがとうございます。

私は、本日司会を務めさせていただきます、大東市福祉・子ども部こども家庭室子ども政策グループの道岡でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

それでは開会にあたりまして、栗田福祉・子ども部総括次長からご挨拶申し上げます。

栗田福祉・子ども部総括次長

皆さん、今日は暑い中、またお足元の悪い中、お越しいただきありがとうございます。

本日は、今年１月下旬に開催させていただきました令和５年度第１回「大東市幼保小の架け橋プログラム検討会議」に引き続きまして、カリキュラムの検討をお願いしたいというところでございます。

架け橋プログラムは皆さんご存じのとおり、５歳児から１年生の子どもの２か年の育ちを見ていくという取り組みであり、子どもに関わっておられる保育士、幼稚園の先生、学校の先生がお互いに子どもの育ちを理解していただき、気軽に交流していただき、相互理解をすることによって、子どもの連続した学びを捉えていくことを目的とした取り組みと考えております。

本日資料として配布しましたカリキュラムの素案は、あくまで議論のための材料程度と思っていただければと思います。大東市で生まれ育っていく子どもたちの、豊かな成長と確実な育ちにつながるような議論をいただきますようお願いしまして、簡単ではございますが挨拶とさせていただきます。

事務局

続きまして、本日の会議に使用いたします資料の確認をさせていただきます。お手元の資料をご覧ください。

まずは、本日の次第

（資料１）大東市版「架け橋プログラム」（素案）

（資料２）「幼保小の架け橋プログラム」検討会議においてご議論いただきたい論点

（資料３）委員名簿

以上となりますが、すべてお手元にございますか。

それでは議事に入りたいと思いますが、進行については西口会長にお願いしたいと思います。会長、よろしくお願いいたします。

西口会長

よろしくお願いいたします。改めて、委員の皆様にはご参加いただきましたことを心よりお礼を申し上げます。

それではまずは資料１に基づき、事務局より大東市版架け橋プログラム素案について説明をお願いします。

事務局

それでは、今回部会検討用に事務局の方で作成いたしました、『大東市版架け橋プログラム』の素案について説明させていただきます。資料１をご覧ください。

この素案は、大東市の就学前教育・保育施設に通う５歳児と、本市の小学校に通う１年生が、それぞれ１年の間に経験し、身につけてほしい内容をまとめたものです。今後、小学校と就学前施設が交流する際において、お互いに子どもたちがどんなことを学び、経験しているのかを視覚的に理解し、交流の手掛かりとしていただくことを目的として作成しております。

下段の小学１年生のカリキュラムは、教育委員会において、各公立小学校共通の内容として作成しました。上段は就学前施設に通う５歳児のカリキュラムです。こちらについては、園ごとに自由に編集していただくことを想定し、極力一般的な内容によって構成しております。

５歳児、１年生のそれぞれの経験させたい内容は、「幼児期の終わりまでに育ってほしい１０の姿」に基づいて作成しました。就学前の子どもの育ちが、小学校入学後にも継続し、教科の学びに繋がっていくことを念頭に置いております。

真ん中の灰色の囲みは、幼保小の具体的な連携の取り組みを記入していただくスペースであり、小学校と就学前施設が、プログラム策定後、実際の連携の取り組みについて、どの時期にどのような交流を行うのかという内容を記載いただくことを想定しております。

今回検討を行っていただいております『幼保小架け橋プログラム』は、こちらのＡ３サイズの表の作成が目的ではなく、これを手掛かりとして、２カ年の子どもの成長を可視化し、就学前施設と小学校で子どもの育ちに関わっておられる大人同士の交流を具体化することが最終的な目的となるのではと考えております。

本日、委員の皆様には、資料２といたしまして、あらかじめ４つの論点をお示しさせていただいております。１点目の素案に関するご感想からスタートしていただき、「架け橋プログラム」の目的、現場で教育に取り組んでおられる方々への周知、また、今後の具体的な幼保小連携の取り組みにつきまして、幼保小のそれぞれのお立場から、ご意見をお願いいたします。以上で、素案の説明を終わります。

西口会長

説明ありがとうございました。それでは、事前にお配りしました「資料２　ご議論いただきたい論点」に沿ってご意見を頂ければと思いますが、そのような進行でよろしいでしょうか。まずは項目１について、事務局より説明をお願いします。

事務局

項目１になります。

今回、会議資料としてご提示させていただきます、大東市版架け橋プログラム素案は、５歳児から小学校１年生までの２４か月間の子どもの育ちのカリキュラムを記すとともに、幼保小の連携の取り組みを各園・学校ごとにご記入いただくことを想定した案として作成しております。こちらの素案の構成・内容につきまして、ご意見をお聞かせください。

西口会長

素案の構成・内容について、委員の皆様が、まさに子どもたちと直接関わられている中での所感といいますか、子どもたちの発達や個性、また各園・保育所等での日頃の取組などを照らし合わせた時の整合性などについてご意見をお聞かせください。

前回の会議では、言葉や概念が園や保育所、学校等の間においてニュアンスが異なる部分もあるんじゃないかとというご意見もいただいた記憶がございます。今回プログラムの素案の中に、そのあたりのすり合わせをする必要があるようなものもあるかなと、そういった観点からでも何かご意見があればと思っておりますので、そのあたりもよろしくお願います。

Ｂ委員

基本は１０の姿をベースとしてお考えいただいているのかなと思いますが、私としてもこういったプログラムを策定するにあたって、カリキュラムの面と連携という面の両面を、こどもまんなかという形の中どうしていくのかそういうプログラムにしていければいいなと思っています。

この素案は１０の姿の中で、５歳児ならこう、小学校１年生ならこうというのを具体的に書いていただいているのでしょうか。それとも漠然と就学前と小学校の姿としてお考えいただいたのでしょうか。５歳は５歳、１年生は１年生でもう少し具体的にしていかないと、見えにくいところがあると思っています。

もう一点は、カリキュラムという表現の仕方なんですけれども、幼稚園由来の方々はカリキュラムを作成することは慣れていらっしゃるのかなと思いますが、保育園由来の施設の方々はカリキュラムという概念で書けるのかが不安です。

西口会長

１点目が、資料１にある項目が、５歳児と１年生の実態に沿った形での記述を意識されたものなのかどうかということですね。それについてはどうでしょうか。

事務局

素案につきましては、５歳児と１年生を念頭においたものと考えていただければと思います。その内容等を具体的にすべきかという点については、ご議論いただきたいと思います。もっと細かい叩き台を作ると、変更等が生じた時に差し替えに対応するのが難しくなるかなと思いまして、できるだけ平易な言葉で、かつ項目をある程度分けないというような作り方にしています。

西口会長

幼稚園ではカリキュラムとして落とし込みやすいが、保育園では難しいという部分についてはいかがでしょうか。

Ａ委員

恐らく、この素案を具体化するようなイメージを持たれているのかと思いますが、具体化したものを架け橋プログラムから落としてくるというよりは、今までも５歳児の年間計画はアプローチプログラムという位置づけでやってきて、保育所等も幼稚園も含めてこの１０の姿というのは、日々のカリキュラムに沿ってやっていった結果としてこういう姿になり、ここが到達目標ではないよという位置づけです。

だから、先生方の立てる具体的な保育課程・教育課程は変わらないと考えていいのではないかと思います。

繋がりが見えるというかそのための架け橋なので、そのための手がかりとして１０の姿を示していただいた。そもそもこの１０の姿を幼児教育で示したときに、大体こんな感じで子どもたちが小学校へ入学していきますよっていうのを小学校の先生方にイメージしていただけるようにするためにこれを作っているので、手がかりとしてはこれが間に入るっていうのは、今までの流れからみても妥当なのかと思います。

１年生では教科教育をベースにしたスタートカリキュラムを作っていますが、学習指導要領でいろいろ縛りがある中で、どの科目でそういう活動が可能なのかを考えた時に、国語・算数というよりは総合的な活動、例えば特別活動とか、内容的にもそのあたりに入ってくるのかなと思いますが、教科はくっきり分かれないかもしれない。でも教科に入れこめないと、１年生のカリキュラムでは具体的になっていかない。実際問題どれだけ具体的にできるかっていう課題は大きいと思いますが、１年生にそういうのが入っていってはじめて架け橋になるのかなと思います。だから、保育所ではやりにくいっていう部分は何も心配することはなく、今までのままで、育ってほしい姿のところは離れないので、具体的なところは変わってこないという理解でいいのでなないでしょうか。

Ｂ委員

このカリキュラムに沿って実践していただくものとして作っていく中で、小学校側では１０の姿でいいのか、３つの柱で書いた方が教科的にやりやすいのでしょうか。

Ａ委員

学習指導要領の改訂内容を見ると、一定の特別活動的な学習の時間とか、教科を超えての全体計画などの部分と、１０の姿の文言というのは、割とリンクできるところがあると思っています。ただ、時間的に入れる余裕があるのかなと。小学校の先生方の感覚としてその辺はいかがなのかお聞きしたいと思います。

Ｇ委員

いろいろな観点があると思うんです。これが架け橋の手がかりとなるというところの観点で言いますと、小学校の立場からすれば、５歳までの育ちを学習指導要領の中で言い換えたり、繋がりを整理したりして、文言に慣れるためには「１０の姿」がいいのかなと思います。「１０の姿」という言葉は知っていても、具体にそれが小学校においては何にあたるのかというところをあまり意識する機会がありませんので。一つ一つ精査してみたらこういうことなのかなというところです。お互いを知る手がかりとしては、「１０の姿」の方が聞きなじみのない言葉だからこそ、あえて勉強ができるというところではいいかなと思います。

Ｂ委員が言ってくださったように、小・中・高の三本柱「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」などの学びが、「基礎」として連なっていますので、小学校としてはそちらの方が圧倒的に分かりやすいです。ですが、互いを理解するためのハードルを越えるとしたらこちらの整理の方がいいのかなと思います。

Ａ委員

幼児教育の方は三つの柱の基礎という言い方しか降りてきていないので、今のように具体的に話していただけると分かりやすいですね。

Ｇ委員

私が１０の姿という言葉に慣れてきたからそう思っているだけかもしれませんが、小学校の先生方にとっては三本柱の方が圧倒的にカリキュラムベースにも落とし込みやすいと思います。学習指導要領の中にも「全ての教科の中に１０の姿、幼児期における遊びを通した総合的な学びから、他教科等における学習に円滑に移行し」と書いてあるので、理屈としては分かっていると思います。

Ｃ委員

この素案は市内全ての小学校や就学前施設で共通で使用して、グレーの連携の部分だけをそれぞれの施設で記入するという感じになるのですか。

事務局　栗田総括次長

そうです。

Ｃ委員

連携に特化すればこの書き方でいいと思いますが、実際問題、お互いの施設を行ったり来たり、いろんなことを共同でしたりとかは難しいので、そんなに連携はできないと思っています。ですので、５歳児と１年生の２年間の横のつながりで、どういう連携をするかというのを書けるようにした方が良いのではないでしょうか。４月から３月の５歳児の欄の右側に、４月から３月の１年生の欄を作って、５歳児の活動内容を１年間書いて、３月に卒園式があり、次に入学式があって１年生になるという、横の活動の流れを記入した上で、例えば一番下に具体的な連携を少し書けるようにする方がわかりやすいのかなと思います。

カリキュラムの内容も、すごく細かく丁寧に書いていただいていますが、文字量がすごく多いので、カリキュラムの内容はリーフレットとかにして、表の部分はキャッチーな言葉だけしっかり書いておいて、中身は自由に作れるようにした方がいいと思います。特に私立の幼稚園や保育所だと、教育・保育の内容が施設ごとにかなり違うので、なかなかこの連携の細い部分だけで収まらないと思います。

もし、これがベースでまた別に各項ごとに自由に作れる表があればいいと思いますが。

また、内容が細かすぎて、現場では読んでもらえないかなという気がしました。特に５歳児の方の表現が固いという印象があって、うちの園では「指導上の配慮事項」は「先生の関わりは」と言い換えたり、「人と関わる力」というよりは「仲間づくり」や「心が動く」とかそういう柔らかい書き方をしたりして、現場でも分かりやすいようにしているので、そのあたりの工夫もしていただけたらいいのではないかと思います。

西口会長

カリキュラムの形として、１つは同時進行の連携、もう１つは２４か月で見た時の連携が記入できるようなものということですね。

Ｃ委員

カリキュラムとして繋がっているっていうのも書けるようにした方が良いと思います。実際５歳児の４月と１年生の４月ってカリキュラム的には連携していないので、園で１年間過ごした上での小学生っていう連続性っていうのがこの表だと書きにくいかなという気がします。

西口会長

２４か月の連続性のあるプログラムの方が現場では使いやすいのではないかという意見でした。そのあたりはまた後程議論させていただきます。

幼保小が連携していくという姿を重んじるのであれば事務局が提案した素案の形になると思いますが、２４か月の段差がないプログラムということであれば、横長の作り方というのが考えられるかもしれません。

Ｂ委員

就学前教育・保育というのは大きく言うと土台づくりだと考えています。土台の捉え方には、計算や書き取りといった勉強的なものの先取りという考え方や、将来何かをしたい時の基礎となる力を育てるという考え方もあると思います。その土台を踏まえた上で、次のステップである１年生のスタートに繋がればいいなと思います。

西口会長

土台についてもう少しご説明いただけますでしょうか。

Ｂ委員

具体的には教科単位のものではなくて、横断的な学びの中で数字や文字の概念を学びながら、その中で友達同士の人間関係を作ったり、気持ちを伝え合ったりするようなことや、小学校へ行って先生から教科的に教えられた時に、理解して取り組もうとする気持ちということだと考えています。

西口会長

必ずしも目標とするものではないが、遊びを通じて得られる何かが土台ということでしょうか。

Ｂ委員

そうですね。実際、計算や英語教育などやろうと思えばできますが、英語というものがあることを理解するとか、いろんな国の方々がいることを理解するとか、そちらの考え方です。

Ａ委員

認知能力と非認知能力があって、Ｂ委員は非認知能力の部分のうち、学びに向かう力、意欲、好奇心、探求心や自己肯定感の部分を土台であるとおっしゃっていると思うんですが、総合的な「遊び」から「学び」に向かう力を育てていくというのが幼児教育です。

認知能力の方がプログラムの中心になっていくというか、そもそも幼児教育と学校教育で違うものを、具体性をもって架け橋プログラムにまとめていき、カリキュラムとしてマネジメントも回すとなると、かなり難しいと思います。先程、プログラムの記載内容が細かいという意見がありましたが、本当は原理原則みたいなところを示した上で、それに向けて取り組んでいかないといけないのかなと思います。就学前施設も小学校も、それぞれ大事な力を育てるために今まで計画を立ててやってきているので、架け橋プログラムを受けてやり方を変えていかないといけないということではなく、これまでどおりでいいのかなと思います。

ただその中で、連携の取組という部分で具体的にどのような活動をするのかというところが今求められていますが、そこの具体性をもった活動の部分が全然示されていない中で、具体的にという言葉だけが降りてきているので難しいというのが今の段階ではないかと思います。

また、保育所は子どもたちが今後どのような方向性で教科教育を通じて、子どもたちが育っていくのかという、見通しをもつことは苦手な部分であり、小学校の先生はここまでどういう育ちをしてきたかという姿が見えにくいんだと思います。その部分で共通の認識を持つために、子どもに関わる大人同士が連携しましょうと考えていくのが、架け橋プログラムなのかなと、お話を伺っていて思ったところです。

西口会長

ただいまＡ委員から項目２に目を向けて発言いただきましたけれども、そもそも保育・幼稚園の立場と学校の取組の持つ意味というか違い、ただやってること自体は変わるものではありませんが、視点の違いでしょうね。この視点の違いというところをある程度埋めていくことが必要となってくるんではないかと思います。項目１のことにつきましては後の話にも繋がってきますので、議論を先に進めさせていただければと思います。今まさにご指摘がありました項目２のことについて、事務局ご説明いただけますでしょうか。

事務局

「架け橋プログラム」につきましては、紙面の完成をもって完了とする取り組みではなく、２４か月間の子どもの育ちを視覚化することにより、幼保小において就学前後の教育・保育に取り組む大人同士の相互交流の取り組みを進めることが重要であると考えております。この考え方につきまして、ご意見をお願いいたします。

西口会長

可視化されたプログラムをゴールとするのではなくて、プログラムを基に、大人同士、それぞれ教育・保育に取組む者同士の相互交流をすることの重要性等を事務局としては考えていただいているということでした。このあたりにつきましては、先ほどＡ委員からもご指導いただきましたし、私自身も重要だと考えております。そのあたりにつきまして、いかがでしょうか。

Ｂ委員

５歳児から小学１年生の２４か月の子どもの育ちの視覚化ということなんですけど、やはり目で見るに勝ることはなくて、小学校の先生に５歳児の様子を見ていただき、保育士が１年生の様子を見ることが必要だとすごく感じます。

保育業界は非常に遅れているところで、大東市でもうちだけなんですけれども、公開保育を私立の保育園ではほとんど実施していないんです。現在は、小学校の先生が来ていただく機会はあっても、配慮のいる子どもたちの引継ぎに特化しているので、小学校に向かう子どもたち全体の姿を見ていただくという機会を、保育所側で作っていただけたらと思います。公開保育に来ていただいた方からは、子どもたちはここまでできてるんですねっていう評価をいただくことが多く、見るに勝るものはないと感じます。昔の教育委員会では、小学校の先生に保育士体験をしていただいたり、保育士が１年生の算数国語の授業を受けさせていただいたりしていたんですが、コロナ禍の後はできておらず、何らかの形でお互いの姿を見ることができるような連携ができればと思います。

西口会長

お互いの学び・交流というところで、実際に自分たちで様子を見て、いろいろと建設的な取組ができたらいいかなとまとめていただきました。

プログラムさえ策定すればよいというものではないということは、委員の皆さんの中で共通した認識だと思います。実際には架け橋プログラムという、まさに架け橋という言葉を重視するならば、プログラムの策定に留めるのではなくて、それを実施化するための架け橋となる共有というものがセットになると感じています。

そのあたりについて、特に異論がなければ先に進めていきたいと思いますがよろしいでしょうか。では、項目３に移りたいと思います。事務局より説明をお願いします。

事務局

「架け橋プログラム」の検討にあたりまして、検討部会においては委員の皆様の意見交換による、プログラム作成を目指しているところですが、一方では、幼保小の現場で働く職員・教員の皆さんに対する、「架け橋プログラム」の周知の取り組みが必要であるものと考えております。

取り組みとしては例えば、「架け橋プログラム」の制度理解に向けた研修会の実施や、幼保小各施設における意見交換等が考えられますが、「架け橋プログラム」に係る現場の理解と意思統一に向けた取り組みの必要性について、ご意見をお願いします。

西口会長

項目３は、幼保小の現場で働く先生、保育士への周知の必要性についてご提案です。具体的には研修会や意見交換会の実施が考えられますが、このあたりを事務局の方から提案をいただいておりますが、実現できるかとか、他にも説明や意見交換、意思統一としてこんな方法があるんじゃないかということなど、ご提案いただきたいと思います。

例えば研修会を開くとすれば、開催方法や時期などを具体的に考えていく必要があるかと思いますが、スケジュールを合わせたり、オンラインやオンデマンドを研修のチャンネルとして使うこともできるのかもしれません。また、対面でやり取りを交わすこと自体がお互いの観点の違いというものに気付くきっかけになるというところもあるかもしれません。実際の今までの取組をさらに押し広げて、意思統一や認識のずれを埋める取組についてのご意見もありましたら、ぜひ今回ご提案いただければと思います。

Ｂ委員

まずは理事長や園長に周知を行い、それを現場の先生におろしていただく方が進みやすいと思います。もう一点、先ほど西口会長からお話がありましたが、私立の就学前施設ではそれぞれでいろいろな取り組みやっていらっしゃいますので、パブリックコメント的な皆さんの意見を聞く場を設けた方がいいのかなと思いました。

西口会長

一人一人の職員の方よりも、まずは運営されている理事長・園長から周知を進めるということですね。あとはもう少しいろんな意見をいただく、そのような形を設けたいと。

Ｂ委員

結局現場が聞いてくれないとやってくれないので、そういった機会を与えないと。

Ｄ委員

北条地域にはふれあい協議会というのがあって、公的機関や私立の民間園の保育園も入ってくださっているんですけど、そこではすでに５歳児の担任と１年生の担任の先生との間で、就学した子どもの話ができる場があり、その中で子どもたちの小学校での育ちを教えていただいて、保育所にいる時にはどうだったというところの意見交流ができています。子どもの様子の伝え合いや、保護者との関係、こども園で幼児期はどう過ごしていたかっていうことも伝え合い、どんな育ちをしているのかなっていうところの確認をしあう場として、かなり前から継続している取り組みです。

西口会長

それはどういった時期に開催されていますか。

Ｄ委員

年２回で、６月くらいに１回、ちょうど学校に入学したタイミングで開催しています。保育所側から見たら、子どもたちは学校でこんなふうに頑張っているんだなということがよく分かりますし、学校の先生方からは、保育所時代ってどんなお子さんでしたかということを聞いてくださって、１０の姿に合わせながら交流をさせていただいてます。

西口会長

地区によっては、そういった形で綿密なやりとりがあるんでしょうか。地域教育協議会といったような。

Ｈ委員

四条地域でもやってます。地域が限定されていますけれども、西側の地域の先生方もそういった取り組みをしているということはご存知でしょうか。

Ｆ委員

地域教育協議会はあります。

Ｈ委員

協議会には公立幼稚園は入っていても、公立保育所は入っていません。地域によっては、中学校区で私立の幼稚園も入っていらっしゃるんですか。

Ｃ委員

入っています。

Ｈ委員

公立保育所は入っていないんですね。

回数は限られてくると思いますが、小学校にいった子どもたちの就学前の育ちのことを直接お話できたり、小学校に入ってからのこと、教育にどう繋がっているかということを聞けたりすると、それこそ本当の連携なのかなと思います。もちろんコロナ前のように参観に行かせていただいたりとか、運動会を見せていただいたりするのとともに、小学校の方からも先生方が来られて子どもたちと交流をしたり、また園での様子を見ていただいたりという機会が持てたら、就学前の施設で子どもがどのように育っているかというのを見ていただけるいい機会になるのかなと思います。

いずれにしても、架け橋で１０の姿を基に子どもの姿を捉えるとっていうふうになっているのであれば、このプログラムの中でかなり細かく書かれていますが、各園の特色を示すとそれぞれ内容が違ってくると思うんです。それを全部書けばいいのか、それとも先ほどＣ委員がおっしゃったみたいに、そこはより現場の先生たちが分かりやすくコンパクトにまとめながら連携の方をどうするのかとか、それに付随する２４か月の繋がりを具体化した方がいいのかというのも含めて、１０の姿で捉えた子どもの育ちが就学前施設ではどうなっているのか、学校に入ってからはどうなっているのかというのを互いに見合うことが連携の一つなのではないかと思うんです。

西口会長

交流の機会を活用しながら、架け橋プログラムをベースにした認識のすり合わせの場は、各地区であるということでしょうか。

Ｅ委員

うちの保育所からは複数の小学校に進学していますが、全然小学校との交流がないんです。皆さんの話を聞いて、北条地域の取組は知っていたんですけれど、西部にもあったんだと今知って、驚いていたところです。

諸福小学校では、地域教育協議会にはどこの施設が参加しているのですか。諸福小学校にも色々な地域の保育園や幼稚園から進学されているのかなと思うんですが。

Ｆ委員

地域教育協議会は、諸福中・小・幼、ＰＴＡと青少年指導委員・自治会区長や民生児童委員、こども会などが入っていますが、私立の就学前施設は入っていません。

Ｅ委員

教育委員会的な感じですか。

Ｂ委員

中学校区で構築した時の形がずっと継続しているということでしょうか。

Ｆ委員

　そうですね。

Ｄ委員

全市的に取り組めたらいいなと思います。うちの園からも４～５校に就学していますが、協議会があればその場に出向かせてもらって話ができるし、それが望ましいと思います。今は限られた子どもさんだけの情報しかやりとりができていませんので。

西口会長

そういった全市的な架け橋に関する理解や意思統一の機会というのが必要だと思います。

Ｂ委員

育ちのカリキュラムという面と、お互いの困りごとなどの情報をすり合わせしていくような面の両面があると進みやすいですし、ありがたいと感じます。

Ａ委員

架け橋プログラムというものをカリキュラムとして考えた時に、制度的な部分と、内容的な部分は分けて整理する必要があると思います。カリキュラムの内容としては先ほど言も申し上げましたが、１０の姿というのはもともと各園の計画等に含んでいますので、これに合わせて自分の園のカリキュラムはどう変えるかみたいな動きは必要ないと思います。ただ、制度の部分で縛られているところをどう整理するのかというのが難しくて、各地域でバラバラなところを大東市として介入していただくというか、制度的なところを整えていただくというのが、方向性として必要なのかなとは思います。

西口会長

制度のところでしたら、一人一人の子どもの顔が見えるような形での連携というのはどうしても地区ごとに委ねた方が、自主的な連携につながると思いますので、そのあたり使い分ける必要があるというふうには思いました。

Ａ委員

保育園にはかなり広範囲の地域から通ってきているので、どこかの小学校１校だけとの連携という風にはいかないので、そこも含めた連携の形をとろうと思うと、いろんなところに行かなければいけないので大変ですよね。

Ｂ委員

家庭の安定が子どもの安定につながることが多いので、家庭の安定の方を考えてしまい、どこまで保護者に寄り添うのか非常に難しいところかもしれませんが、情報共有が非常に重要です。小学校より先に放課後児童クラブが始まり、小学校の始業式を迎え、保育所から小学校へ上がったご家庭は夏休みを迎えて、こんなに長いんだって初めて気づく場合もあります。こどもまんなかだったら、取り巻く環境の中で、小学１年生のお子さんのいる保護者が、安定して子どもといられる状況の整備についても、できればこのプログラムに加味してもらった方が、現場としてはやりやすいかなと思います。

また、家庭状況については、就学前であればお分かりになってると思いますので、こういう特質をもっていますとか、こういう捉え方をされますというような話が、地域で就学前と小学校で共有できると、先生たちも困らないと思います。

Ｇ委員

項目２、３を兼ねてのお話になるかと思うんですけれども、この架け橋プログラムというのを一つの手がかりとして、どのよう活用ができるか考えていました。教育委員会は２年目の先生の法定研修で、保育園所で研修をさせていただいておりましたが、最近はコロナ禍でできていませんでした。そこで、去年と一昨年は諸福幼稚園の実践を聞かせていただきました。今年は第２聖心保育園で実際に保育の様子を見て、お話も伺わせていただく予定をしています。その際このプログラムがあれば、子どもたちを育てておられる園の意図がわかるのではないか、と思います。また、先ほど、架け橋プログラムに教科名を具体的に書いたらどうかというお話もいただいて、確かにそうだなと思いました。例えば、「生活する力」の後ろのところに、主たる教科としては生活や特活や道徳と書けばイメージを持ちやすくなるのではないかと。もちろん全ての教科で扱うのはそうなんですけれども。「豊かな感性と表現」であれば生活・図工・音楽・体育などですが、イメージを持ちやすくなるのかなと思いました。

２年目研修は法定研修ですので、全ての教員が２年目で参観させいただくことになります。時間はかかるかもしれませんが、ゆっくりゆっくり理解は深まっていくのかなと、お話を聞きながら思いました。

西口会長

法定研修と抱き合わせで。

Ｇ委員

そうです。具体な活用の方法としては一番理解が深まっていくのかなと。

Ｄ委員

うちの園では、地域教育協議会で公開保育を実施しており、毎年計画していますが、小学校からは参加者が１人とか、なかなか参加していただけません。学校の先生って午前中の参加はむずかしいのでしょうか。

Ｇ委員

こども園も同じだと思うんですが、子どもがいる時間帯は離れられないというのが現実なのかなと思います。ですから一人でも参加すれば、その人が見てきたことを、例えば伝達講習で他の教員に伝えるなどして、情報共有できるのではないかと思います。なかなか複数人が参加するのは難しいと思います。

Ｆ委員

幼稚園では13時～13時50分ぐらいの時間帯に公開をしていて、各学校にご案内を出したら、支援コーディネーターの先生が来てくださることが多いです。その後の研修まで残ってくだることもあります。

Ｈ委員

時期をうまく工夫して、例えば夏休みの期間でも難しいですか。保育所はずっと開いているので。

Ｂ委員

前に、市内の民間保育園全体で、低学年の先生とかできれば小学１・２年生を受け持つ先生と連携したいというリクエストを投げさせてもらったんですけど、来年どうなっているか分からないというところで、結局配慮のいる子どもたちの担当の先生ばかりになってしまった。理由は、その先生たちは来年も同じ役割をするだろうからということで来て下さったということでした。制度的に難しいなと思いますが、できれば現場の先生に、１名でもまず来ていただくという形が取れたらいいなと思います。

Ｇ委員

厳密に言いますと、支援を担当している人間も来年どうなるかは分からないんです。支援を担当している先生や、今担任を持っていない先生は、学校を俯瞰している立場にいますので、伝達講習など、職員会議等でお示しはしやすいのかなと思います。

Ｄ委員

以前に２年目研修に来ていただいた時に、子どもってこんな姿を見せるんですね、もうこんなことができるんですかという驚きをいっぱい持って帰っていただいたというのがあって、良かったなって思っています。

昨年、授業を見に来てくださいと言っていただいたので、小学校へ行った時に、小学校はこんな風に授業されてるんだというのを知ることができたということがあるので、架け橋プログラムを作るにあたっては、相互に行き来できれば良いと思いました

西口会長

相互の行き来というような形の取組、項目４に関する話でもありますけれども、交流を通じてそれぞれの立場での理解、お互いの理解を示すというところが大切になるかなと思っております。項目４に関係するお話にもなりますので、改めて事務局より項目４に関してご説明をお願いします。

事務局

　国が作成した、『幼保小の架け橋プログラムの実施に向けての手引き』におきましては、「幼保小架け橋プログラム」が、子どもに関わる大人が立場の違いを越えて連携・協働し、架け橋期にふさわしい主体的・対話的で深い学びの実現を図り、全ての子どもの学びや生活の基盤を育めるようにすることを目指すもの、と定義し、教育内容の可視化によって、地域や施設の創意工夫を活かした取り組みが広がり深まることを期待するとしております。幼保小の連携・協働に向けた相互交流の取り組みとして、具体的にはどのような活動を期待しておられますか、ご意見をお願いします。

会長：西口

項目４は、架け橋プログラムの実施について、幼保小の相互交流の具体的な取組みについてです。改めてどんな活動が期待できるかということに関してご意見をお願いします。

すでに交流を実施している施設もあると思いますので、実践の中での意義、課題ですとか、実際はこの地区ではできていても、あの地区では難しいかもねとそういうようなところを含めてご議論いただければと思っております。

Ｂ委員

連携のお話は色々出てきましたが、実際北条こども園で公開保育をした時に、民間保育園から参加したのは私だけでした。保育業界ではそういった同じ子どもを育む中で、別の施設との連携ができていないので、まず自分たちの集まりの中で、これは積極的に行くべきものだと声掛けをする必要があります。私自身参加をしてみて、他の園ではこんなことに取り組んでるんだというのを見ることができましたし、旧知の元園長先生に会うこともできて、非常にありがたい時間でした。架け橋プログラムが、近隣との連携を取るきっかけとなり、子どもたちを育むための取組として必要なものにできたらいいなと思います。

西口会長

プログラムが柱になって、この柱があるんだから連携やりましょうよっていうような感じで互いに声掛けといいますか、メッセージを伝えるきっかけとなればということですね。

Ｂ委員より、連携が難しいというようなお話をいただきましたけれども、どのあたりが大きな障壁になりそうでしょうか。

Ｃ委員

私の園だと、小学校とは距離が離れているんですが、隣が中学校なので中学校と連携しています。今年は６月に中学３年生が７０人ぐらい園に来てくれて、７月にはうちの年中クラスの子どもたちが７０人ぐらい中学校に行き、家庭科の授業の一環で、紙飛行機を一緒に折るというので１時間一緒に過ごしたんですけれども、そういうのが小学校でもできるとは思うんです。正直なところ、私立の幼稚園のカリキュラムが多岐に渡っており、園によって違いが大きいので、そこにどう架け橋を入れていくのかっていうのが課題と思います。

制度理解に向けた理事長・園長を対象とした研修会は、市主催で考えていただくのがいいと思います。こども家庭庁に頼めば講師に来てもらえるのではないでしょうか。また、幼保と小学校と現場の先生同士の意見交換とかも必要だと思います。例えば、小・中学校では夏休みに中学校区ごとに研修会をやっていますよね。だいぶ前に一度そこに呼ばれて幼稚園の話をしたことがあるんですが、そういう機会に、幼稚園・保育所もそこに入っていけるような仕組みになれば地域ごとでしっかり情報交換できるんじゃないかと思います。

Ｇ委員

合同研修会のテーマによるのかなと思うんです。

Ｃ委員

そこは架け橋をテーマにしていただいて。中学校だと難しいかもしれませんが。それもありかなと思います。

Ｂ委員

四条中学校では、学び合いの授業をやっていて、就学前でやっていることが学校へ行くとそういう言葉に変わるんだというのがあり、学びにはなりますが、運営者側がやろうと思ってくれないと現場はほとんど動かないと思います。

Ｃ委員

公開保育はやってくれそうな気はしますね。

Ｂ委員

園から小学校へ行く方が制度的に作りやすいのか、園に来てもらう方が作りやすいのか。

Ｇ委員

研究授業と参観を合わせれば年間５回以上はありますので、そこに来ていただくのはすごくいいなと思います。ただ、毎回テーマや研究の主題があるので、そこでどのくらい架け橋の話ができるかというところはちょっと話が別になってくるかもしれませんが。まずは知っていただくというというところで来ていただくというのは良いと思います。

Ｂ委員

架け橋の研究委員会を作っていただくというようなことがあれば動けるんですかね。学校現場に任せることってあるんですか。

Ｇ委員

研究授業というのは例えば教科や人権教育等の研究です。そこに架け橋も、ということになると、討議の柱が複数になってしまいますので…、まずは先ほどおっしゃられました知っていただく、見ていただくというところからはじめていただくのがよいのではと思います。

架け橋でいいますと、２年目研修において理解を深めていただくことが、時間はかかるけれどもいいのかなと個人的には思います。

Ｈ委員

今まででしたら、２年目研修でたくさんの先生方が公立も民間施設にも来ていただいていましたが、今後はそうではなく、例えば園での公開保育あった時に、どなたかは行かれるような形での取組になるのでしょうか。

Ｇ委員

以前は、府の研修で社会体験研修があったのですが、それが制度設計の中でなくなってしまい、二日間連続して研修に行くことが難しいので、他に何か方法がないかなと模索している状況だとご理解いただければと思います。

Ａ委員

このプログラムのグレーで着色されている、連携の取り組みとしてここに入る相互交流の具体的な内容として、教員の交流というのも入ってくるのでしょうか。それとも子どもたちがどう交流するのかという内容になるのでしょうか。国の手引きを見てもそこが整理されていないというか。ここにどんな内容が入ってくると、プログラムとして成立するのかという部分が今、混乱していると思います。制度的なところでは大東市はこんな形で研修に盛り込むとか、そういうことも必要なのかなと感じました。

先ほど教科ということを言いましたけれども、幼児教育の方では、５歳児のところではくっきり分けられないけど、主に５領域のここっていうのを入れると、両方にとって繋がりやすいのかなと思います。それぞれ具体的にいろいろな保育の方法もあるので、それをプログラムにどう落とし込むかじゃなくて、今までやってきたことの中にこれが含まれていますっていう理解で良いのではないかと思います。

西口会長

そもそもプログラムの体裁というか形ですよね、連携の取組のところに何が入るんだという部分を整理する必要があるんじゃないかというご意見でした。このあたり事務局としてこういうイメージがあるんだというのがありましたらお教えください。

事務局

架け橋プログラムの素案を、１２か月プランでいくのか２４か月プランでいくのかというところですが、今回の素案を作るときに、文字数を多く入れてしまいましたのでこの形にせざるを得なかったというのがありました。文字数を整理して、Ｃ委員がおっしゃられたように、横に並べて子どもの２４か月の育ちをどう見ていくかという作りにした方が分かりやすいというような考え方もあると思い、モデル事業をしている市町村のプログラムをいろいろとみてみたんですけど、やはり２パターンありました。プログラムについては、園と学校の考え方で作って、作り方が分かれてくるところがあると思いますので、もっと応用の利きやすい形に整理して、自分がやりやすい形で作れるように様式的なものを作成し、次回の会議ではそれをお示ししたいと思っています。最終的にどちらを取られるかというのは施設の判断にお任せして構わないと考えています。

グレーの連携の部分ですが、そこも大人同士の交流を書いていただいた方がいいと思いますが、子ども同士の交流も書いた方が進めやすいということであれば、施設の判断で記入していただいて構わないと思います。

また、教科を書いた方がいいんじゃないかとＡ委員にご意見をいただきましたが、小学校の評価に繋げやすい、国語や算数といった教科を並べた方が小学１年生の担任の先生が分かりやすいというようなご意見があるようでしたら、そういった形で作っていただいてもいいのかなと考えています。

Ｈ委員

大東市版架け橋プログラムは各施設バラバラで良いという考え方ですか。

事務局

小学校の部分は教育委員会で統一されているので、学校ごとにバラバラにならないと考えていますが、就学前についてはそれぞれの園の方で内容を考えていただき、図などを使いながら視覚的に使いやすいようにしていっても構わないと思っています。

Ａ委員

大東市としてこれを作りましたっていうことではなく、各園が一枚ずつ作らないといけないということですか。

事務局

私の認識はそうです。

Ａ委員

大東市としての架け橋がまず求められてますよね。

Ｃ委員

連携の取組は施設ごとに作るものですが、ベースは基本一緒じゃないんでしょうか。

Ａ委員

そういうことかなと思います。

Ｃ委員

施設ごとに変えるんであれば、小学校からしたらバラバラになってしまいますよね。

Ａ委員

この素案はすごくよく考えていただいたなと正直思っていて、連携の取組のところに具体的なものが入っていけば共通して使えるものだと理解をしていました。そうするとまず５領域と科目名があるからそこで例えば縦にして、この５領域からまた大体どこに繋がるのかみたいなところを入れておけば、こういう形で大東市が連携を考えていて、具体的にはこういう活動なんだという部分が見えて、文部科学省が求める具体的なという部分にもある程度対応できているし、補助金の条件についてもクリアできるのかなと思ってたんですが。

Ｃ委員

連携の取組の上下に例えば、５歳児の１年の育ちとか狙いみたいなのを書けるようにして、小学１年生の４月から３月があって、その真ん中に連携の取組が書けるようにするのがいいかもしれないですね。

１０の姿については別のリーフレットで作成して、もう少し広めにスペースがあってもいいのかなと思います。

西口会長

小学校の方はカリキュラムにそんな変わりようはないと思いますので、明確にいろいろ文言を落とし込めると思います。それに先行する５歳児の段階で、どのような活動が各学校園で展開されることが、大東市として期待されるのか、また園の特徴というものがそれぞれありますので、そこは園の方針を踏まえていただければいいのかなと思います。いろいろな表現の仕方はあると思いますが、大東市としてこれは伝えておいていただきたいと、その上で各園での取組がどの部分と紐づいているのかしっかりと認識いただいた上でこのプログラムとしっかりと向き合っていただければいいと思います。実は小学校の学習指導のこのあたりに繋がっている、だからそこを意識した上で活動するというような取り組みになるようにプログラムに打ち込めばいいんだろうなと、今ご意見をいただく中で、私の中でもクリアになる部分がありました。

そのためにどのようなレイアウトが良いのか、既存のままでいいかもしれませんし、２４か月で横に並べる形がいいかもしれません。あるいはハイブリッドで２４か月で並べるとこんな感じになりますけれども、１２か月で並べるとこんな感じになりますよと、そういうふうな見せ方もあるのかなと思います。

それぞれの運営をされている理事長・園長の方々にある程度ご理解いただくところが重要だと、Ｂ委員もおっしゃっておられましたがこのあたりはどうですかね。市としてはプロモーションできるような見通しはありますか。

事務局

行政としては当然後押しをするべきだと思っているので、連携に関する研修の実施についても取り組んでいきたいと思っております。

西口会長

他に、こういう取り組みがあるんじゃないですかねという、ちょっとしたことでも結構ですので、ご意見ありませんか。

Ｈ委員

具体的なカリキュラムの内容とかは施設に任されていると思います、特に就学前の施設については。各園では、１０の姿や５領域をベースにしながら、それぞれの特色を持たせていると思います。そういう色々な施設での色々な特色の中に子どもたちがいて、そこで様々な経験をしている子どもたちが小学校へ上がって、小学校での学習に興味を持ったり関心を持ったり意欲を持って就学してもらうことを目的として、就学前施設で何が共通なプログラムを作らないといけないというものはないので、子どもたちが興味を持つものをしっかりと掘り下げられるように、各施設取り組んでいるところなんですね。

この表の中の家庭との連携という一番下の段の小学校のところに「めざす子ども像」ということが書かれていて、確かにずっと以前から小学校の方では大東市としてめざす子どもというのがあるんですけれども、大東市の架け橋プログラムを２４か月考えていく中では、就学前から小学校の連続しためざす子ども像という大きなものがあれば、就学前施設はいろんな取り組みはしますけれども、最終目的としてはこのめざす子ども像に向かって育てているんだという、それをまた小学校に引き継いでいただくっていう考え方になるのかなと思います。

先ほどからお話もあったように、就学前施設のそれぞれの横の繋がりというのも何かの形で今まで以上に連携をして、小学校から時間はかかるかもしれないけれども興味を持っていただいたり、こちらからも小学校の方へ出向いて学校教育の今を知るという経験もあればいいかなと思います。

西口会長

プログラムに先行する考え方ですよね。こういっためざす子ども像っていうものをおっしゃっていただけたので、このプログラムが策定されたのかっていうところを、もちろんこの後このあたりにつきましては、明文化されていく必要があるんだと思いますけれども、それをなくしてプログラムができましたという形になれば目的が分からなくなってしまうと思います。

Ｂ委員

プログラムとまた違うかもしれませんが、就学前で取り組んでいることで小学校が困っていることはありませんか。以前、字の書き方を教えていただくのは結構なんですけれども、書き順が違うと、間違って覚えてしまった子を戻すのが大変ですと言われたことがありました。

また、うちの園は５歳児がトラックを使ってリレーをするんですけれども、小学校へ行くと直線の５０メートル走から始まるというところで、困ったりしないのかなと。小学校のカリキュラムは変わらないので、こんなふうにしましょうとか、お互いに話し合うような連携の仕方も必要ではないかと考えています。

Ｇ委員

現場の先生にとっては、「何かやっておいた方がいいことはありますか」という園長先生の言葉を聞いただけですごく暖かみを感じると思いますし、書き順を間違えて覚えてしまってなかなか元に戻すことができない姿を見て、こういう姿もあるんですよということを安心して伝えたんじゃないかなと思います。

リレーの話なんですけれども、小学校低学年の体育は「運動遊び」という領域があり、運動会でも普段体育の学習での目標がそのまま反映されていると思います。直線を思い切り走ることや、もちろんリレー遊びもあります。ですから、幼稚園や保育所でリレーをして、お友だちにバトンを繋いでゴールできて楽しかったという思いがすごく大事なんじゃないかと思います。ですので、やってはいけないとか、させてはいけないとかお気遣いいただく言葉はありがたいですけど、公立小学校は全ての子どもたちが義務教育としてスタートを切るという、すてきなところなので、いろんな子どもたちがいて、いろんな育ちの子どもたちがいる。その中で私たちも子どもを一人一人理解しながらやっていけたらそれでいいのかなと思います。

Ｂ委員

年長になると直線を走ることを楽しむということをしていないんですよ。鬼ごっこやマラソンはしますが、運動会では年齢ごとのプログラムとしてリレーになります。４歳・５歳であっても、直線も楽しんで走って、その結果としてリレーになればいいんでしょうけど、ついついリレーの練習だけをしているんだと改めて感じました。

Ｇ委員

ちょっと世間話的にはなりますが、３０メートル走ってピタッとゴールで止まってしまう、つまり、走り抜けようとしないお子さんもいますので、その練習もしたりします。

Ｂ委員

ゴールテープを切るのはリレーだとアンカーだけなんですよね。３０メートル走だと走ったその中の誰かが切りますが、経験がないと走り切らずに止まっちゃうということですね。

Ｇ委員

走ったり体を動かしたりすることや、友達から応援してもらうこと、応援してあげることが楽しいと感じるところの方が大切だと思います。

Ａ委員

最初に土台というふうに言ってくださいましたけど、例えば５歳児がリレーをするという花形的な競技みたいな文化があるので、それをあえて架け橋で何か変えていくというよりは、土台として自分の体を思いっきり動かすことが楽しいとか、例えば小学校の先生から運動会ではこんなふうに走るんだよって言われて、理解して自分の体を動かすことができるとか、そういう力を就学前で育てておくということが、結構子どもって適応力あるので、そこがたぶん社会性などで１０の姿に含まれてくると思うんですよね。もちろん連携というところで連続性とか子どもを混乱させないようにというのも視点としては必要だと思いますが、ただ就学前の教育として大切にすることは、学びに向かうことができるように、好奇心とか意欲、探求心をしっかりと育てるとか、４５分間、自分の体をちゃんと体幹を使って支える筋力とかそういうのを保育の活動の中で育てるとか、その辺が正直家庭の生活の中で弱くなっているので、改めて合わせて連続性というところにこだわるよりはそれぞれのところでやるべきことをきちんとやっておけば、学びに向かっていくのかなと、最初に言っていただいた土台ってまさにそこなのかなと思いながら今聞いていました。

西口会長

ありがとうございます。全体を通じて共有できたっていうことがございましたらいいなと思いますけど。よろしいでしょうか。今回ご議論を踏まえまして素案を修正していくという形になりますけれども、それでよろしいでしょうか。ありがとうございます。それではこの度は委員の皆様、貴重なご意見をいただきましてありがとうございます。

それでは事務局にお返しいたします。

事務局

西口会長、ありがとうございました。

委員の皆様、長時間にわたりご審議いただきまして、誠にありがとうございました。

以上をもちまして、令和６年度第１回大東市幼保小の架け橋プログラム検討会議を閉会させていただきます。